発見！おごおり遺産

No.19 終戦から75年目の夏

戦いの記憶の最終回に、太平洋戦争を取り上げます。戦時中の社会や人々のくらしは、どのようなものだったのでしょうか。

吹上二ツ塚遺跡で出土した銭貨

吹上二ツ塚遺跡の防空壕

大刀洗飛行場と関連施設

終戦から75年を迎えるこの夏、市内に残る戦争の記憶を、いま一度たどってみましょう。

大正8年（1919）から昭和20年（1945）の終戦まで、朝倉市・大刀洗町・筑前町を中心に、当時「東洋一の飛行場」と呼ばれた旧陸軍の大刀洗飛行場が存在していました。現在の甘木鉄道（旧国鉄甘木線）も、元々はこの飛行場に人や物資を運ぶために引かれた路線です。市内にも旧陸軍実弾射撃訓練場（干潟）や練兵場（山隈）が造られ、他にも多くの関連施設が設けられました。

この大刀洗飛行場は、昭和20年3月27日と31日の大刀洗空襲によって大打撃を受けました。市内でも、27日の空襲では帰宅中の立石国民学校の児童が死傷し、現在は「立石平和の碑」が建てられています。31日の空襲では、軍関係者の疎開（そかい）先となっていた花立地区が大きな被害に遭い、たくさんの死傷者が出ました。

この他にも、市内には戦争の記憶を伝える文化財が多く残されています。旧立石国民学校奉安殿（ほうあんでん）は、戦時中に天皇の御真影（ごしんえい）（写真）と教育勅語を納めていた建物で、戦後の解体を免れて現存しています。干潟の旧軍用道路沿いには、境界標があります。これは軍用地と民有地の境界を示すもので、「陸軍」と彫られた角柱が確認できます。

一方、地面の下にも戦争の痕跡は残されています。市内ではこれまでの発掘調査で、多くの防空壕や退避壕を確認しました。吹上二ツ塚遺跡の防空壕は、東西3．3メートル、南北2．3メートル、深さ約1メートルで、2か所に階段を設けていました。内部からは、銃弾の薬莢（やっきょう）や「大満洲國」の文字のある銭貨が出土しています。

花立山麓では、現在も多くの防空壕の痕跡を見ることができます。中でも「たこつぼ」と呼ばれる一人用の防空壕は多数残されており、戦時中の人々のようすが想像できます。

戦争を経験した方が少なくなった現在、体験談を直接聞ける機会は、今しかありません。平和の大切さを学び、次の世代につなげることは、今を生きる私たちの責務と言えるでしょう。

問合せ先　文化財課☎75・7555

おごおり遺産とは？》》近年の市内調査で「再発見」した文化遺産＝市民のたからのこと